

表1-3 茨城県下の祝い棒習俗

地域			名称	削り	用途	文献
1	鹿島町	(字不明)	塞の神	○	柳の木を図のように削って、「塞の神」で成り申せ！成り申せ！元から梢(うら)まで成り申せ！と言いながら庭の果樹の幹を「塞の神」で叩いて豊作を祈る	①
2		(旧大野村)	歳 ^(ママ) の神	○	成木せめ、ぬるでの木を花形に削ぐ「蔵の神」と云う。十四日夜鳥追いの小屋を焼く火で歳の神を燃やし、次の日その棒で柿の木を叩くとその年は実入りが良いと云う／柿の木を鉋で傷つけ、塞の神を模したヌルデの棒(径五、六センチ、長三十センチ)で文句を唱えながら叩く	② ③
3		山之上	サイノカミ	?	15日はマツヒキで、門松を立てた穴へその門松の芯と、ヌルデの木を切って皮をむいて、先を3つか4つに割ったもの(サイノカミ)を当日つくったカユ餅につけ、これを門松の芯といっしょに挿し入れる。又このヌルデと同じのサイノカミを2本1対として、各神へ上げる	④
4		神野	サイノカミ	○	柳の木の枝でサイノカミをつくる。15日には子供達がなりもの木の元を“なり申せ、なり申せ、なんなけりや、切ってしってつと”と唱えごとをしながたたく。終わったら木の元えおいておく	④
5	玉造町	(字不明)	サイノカミ	○	「佐義長」「ワーホイ」といって田か畑の空き地に小屋をつくる…どここの家でも「サイノカミ」といってヌルデの木を一尺程に切った先を菊の花のように削り、それを子供に持たせる。祭りの最後小屋に火をつけて燃やす時、花びらに削った所を火に当てる…子供達は「ワーホイダ、ワーホイダ、鎌倉どんのワーホイダー」とはやし、家々のカキの木をサイノカミで叩き「成るか成らぬか、なりますなります」と歩く	⑤
6	北浦町	長野江	サイの神	?	サイの神で柿梨梅の木の根本をたいて廻り「ナールカナラヌカカーキノキ」「ナリモースナリモース」とやったものです	⑥
7		次木	サイの神	○	ヌルデの木で割り箸を家族の数だけ作り束にしておき、ヌルデの木の棒を花状に削ったサイの神、またザカの所を切りY字形のもので田のくろに立て田の神に供えるものなど十四日に作ります	⑥
8		両宿	サイノ神	○	ヌルデの木で花状に造ったサイノ神と称するもので柿の木をたきながら、一人の子供が柿の木に向かって「なるかならぬか」と大声で叫べば別の子供がその側で「なりますなります」と答える	⑥
9		北高岡	サエの神	?	十四日のワーホイに作ったサエの神を小屋焼きの火で焼きその棒で十五日の朝柿の木を叩く。今は行なわれず「ナルカナラヌカ柿の木」「ナリマスナリマス」と連呼する	⑥
10		行戸	サイノカミ	○	ぬるでの木を切り、荒神様に供えるザカマタ(Y字形のもの)歳徳神に供える十二前の箸、家族全員の箸、サイノカミと称する棒に削りかけてひげをつくりたるもの二本、外に農道具に形どった小道具多数を作ります	⑥
11		中根	幸ひの神	?	十四日に造った「幸ひの神」のひげを鳥追の日に燃しその棒で果樹(主に柿の木)に「成るかならぬか」と言いながら叩きます	⑥
12	麻生町	(字不明)	サイノカミ・セーノカミ	○	サイノカミは、セーノカミなどとも称したが、ユノキで作ったいわゆる削りかけのことである。家によっては、ヌルデまたはモチノキを利用した…房を付けていき、ちょうど「花が咲いた」ようにしたという。できると、床の間などに飾っておいたが、これはのちの鳥追いその他で使うことになった。(十四日、カマクラさんなどと呼ばれる小屋を燃やす「鳥追い」行事が行われるが)このときにはサイノカミを持って行って、焼くということもした…最後まで燃やしきらず、焦げたままを家に持ち帰った。これは、火除の守りとなり、帰ったあとで荒神様にあげるようにした。(十五日)この日の朝には、前晩に焼いたサイノカミをいったん荒神棚から下げてきて、それで柿の木を叩くということをした。これをカキナレ(柿成れ)などともいっていた。柿成れは、親子や兄弟(子どもたち)でやったという…	⑦
13	潮来町	(字不明)	柳箸	※	ユノキの枝に団子をならせ、柳箸といって柳の木をササラのようにして、ともに床の間におき、成り物がよく成るように、「成り申せ、成り申せ」と唱える。またはこれを実のなる木にしぼりつけ「成り申せ」を三回唱える。柳の木をササラのようにして、これに餅をつけて「成り申せ」と唱える家もある	⑧
14	東町	(字不明)	サイマル棒・ナリキ棒	○	柳の枝を長さ四〇センチメートル、太さ一握りぐらいいに切り、三分の二ぐらいまで皮を剥いて房状にし幣束がわりにする。これをサイマル棒またはナリキ棒という。この棒で柿やミカンなどの幹をたたいて豊作を約束させている。これをナリキ責めといい、たたくときに「なるかならぬか、てっぺんまでいっぺえなれ」と唱えた	⑨
15		阿波崎・上須田	サイマル棒	○	夕方、子どもたちが五、六人ぐらいでサイマル棒を持って、花嫁の家へ「嫁ただぎに来たなよー、嫁ただぎに来たなよー」といって集まった。サイマル棒でたたかれては怪我をしまうので、姑は嫁をかばうために、あらかじめ用意していたおひねり(お金)や香蓮(せんべい)などを子どもたちに与え、これを防いだ…これが行われていたのは昭和十三年(一九三八)ごろまでで、その後は姿を消した	⑨

①鹿島町史編さん委員会1974『鹿島町史2』 ②大野村教育委員会1974『大野村の文化4』 ③茨城民俗学会1981『国鉄鹿島線沿線の民俗』 ④茨城県教育委員会1966『民俗資料緊急調査報告書』(昭和40年度鹿島臨海工業地帯) ⑤『玉造町史』玉造町史編さん委員会1985 ⑥北浦郷土文化研究会1965『郷土北浦1』 ⑦麻生町史編さん委員会2001『麻生町史』 ⑧潮来町史編さん委員会1996『潮来町史』 ⑨東町史編纂委員会1997『東町史』